

エイテック

(京都市左京区静市野中町)

プロダクト

京滋企業 最前線

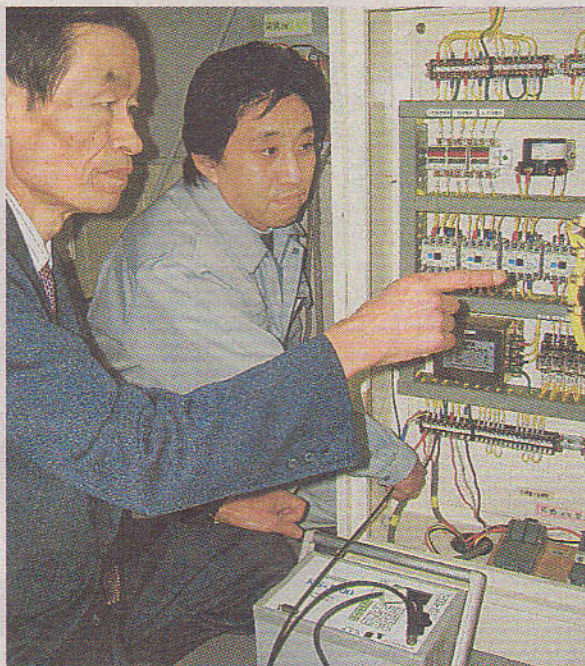
熟練工には、工場設備の異常を機械音や振動で察知できる人がいるという。長年の経験がなせる特殊技能だが、団塊の世代の大量退職で次代への継承が危ぶまれている。

「長期不況の影響で日本の企業は老朽設備を使い続けている。保全技術を高めない」と事故の多発を招く。エイテックの高専社長(左)はそう警鐘を鳴らす。同社は職人の勘に頼ってきた設備診断を機械化することで、事故の原因を未然に取り除く「予防保全」を産業界に広めようとしている。

診断の手掛かりになるのは高調波。電流の基本周波数を整数倍した周波数で、モーターやインバーターなどの劣化や異常で発生する。放置すると機器の焼損や誤作動につながり得る。高専社長は機器の異常や劣化の

《XMO》2002年5月の設立。高専社長が立ち上げた技術コンサルタント会社「高技術研究所」が母体となった。資本金8千万円。従業員は15人。06年3月期の売上高は1億6千万円。

高調波で設備診断



自社に設けた実験設備で診断装置の性能を確認める高専社長(左)。高調波で生産設備の健康状態を調べる「工場のお医者さん」のような存在だ(京都市左京区)

「異常があるとすぐ機器を替える会社もあるが、掃除やグリースで正常に戻る場合も多い。当社の診断技術を使えば、保全費の削減につながり、自分の健康状態を知らせる悲鳴

「症例を三万七千二百件集め、高調波との相関関係を調べて診断法を確立した。そのノウハウが詰まった診断装置は、分電盤センサーを当てて高調波を調べることによって異常や劣化部位を把握できる。」

高専社長と高調波の付き合いは三十七年になる。京都大大学院で研究を始め、韓国・延世大の教授を務めたこともある。当時

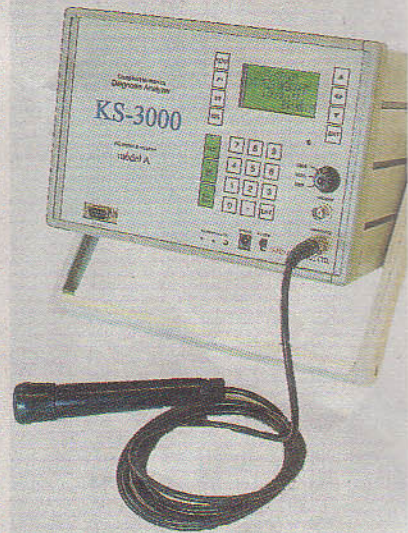
高専社長は「異常があるとすぐ機器を替える会社もあるが、掃除やグリースで正常に戻る場合も多い。当社の診断技術を使えば、保全費の削減につながり、自分の健康状態を知らせる悲鳴

「最初はいろんな工場を回り、ただに近い値段で設備を診断してデータを集めた。そのときの蓄積が今につながっている」と振り返る。

今年十一月には通信機能を搭載した最新型の診断装置を発売した。測定データを同社のサーバーに送れば、数秒以内で診断結果をパソコンや携帯電話で受け取り、発売後一カ月で約二十台を販売する好スタートを切った。装置販売の傍ら、大学研究者や企業技術者と「高調波技術研究会」を立ち上げ、高調波を生体診断に応用する共同研究など、新しい市場を狙った取り組みも進めている。

「ITベンチャーのような華々しさこそないが、地道な努力がここにきて実り始めた」。高専社長はさらなる成長への手応えを感じ取っている。

毎月第二日曜日に掲載します。



11月に発売した診断装置の最新モデル「KS-3000」